

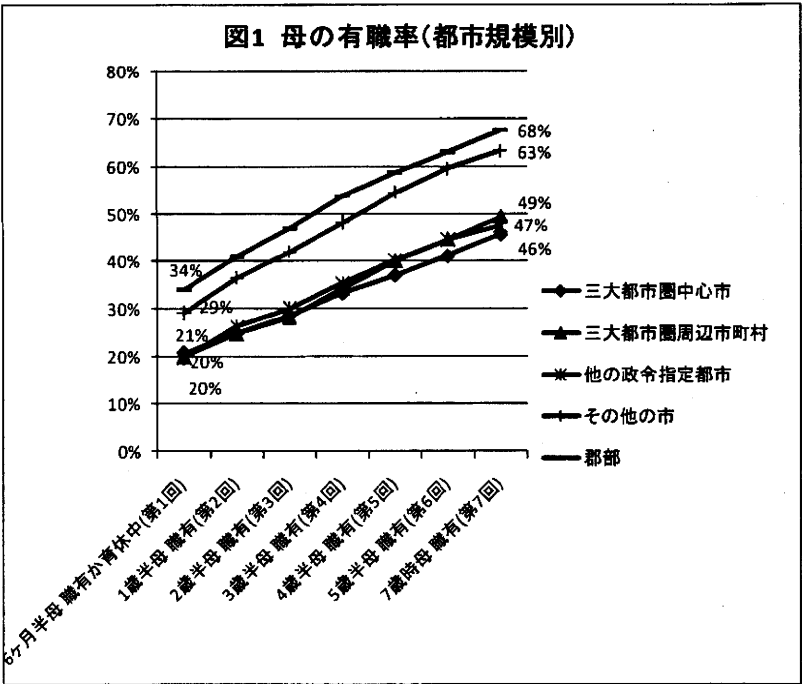
圏以外の地域では県を越える移動をした場合（＝「大都市圏外か県外へ移動」）、の3つに分けた。なお、市町村合併によって県内での自治体移動なのか合併による名称変更なのか不明なケースも、②に含めた。ちなみに21世紀出生児調査では、各回ごとの居住自治体の情報はあがるが、転居があったかどうかの情報は各回ごとには無いので、自治体内での移動は捕捉できない。

そのほかに用いた変数は、母親が何らかの職に就いているか否か（「有職」、6ヶ月時は育児休業中を含む）、「ふだんの保育者」に祖父または祖母が含まれるか（「祖父母保育」）、「ふだんの保育者」に保育所・保育ママ・ベビーシッター（第4-6回は幼稚園を含む）が含まれるか（「保育所等利用」）、祖父または祖母が同居しているか（「祖父母同居」）、「子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない」、「子育てによる体の疲れが大きい」である。また、第1回と第7回のきょうだい数を比較することで、「調査対象児のあとに子供が増えたか」という変数を作成した。

3. 都市規模による母親の有職率と祖父母・保育サービスによる保育支援

都市規模によって、母親が職につく率とタイミングを確認してみる（図1）。
母の有職率は、どの都市規模でも子供の成長にしたがって上がっていくが、大都市部（三大都市圏の中核市および周辺市町村、政令指定都市）よりもその他の市、その他の市よりも郡部の方が、都市規模が大きい方が常に有職率は低い。なぜ大都市部の有職率は低いのだろうか。

ところで、父親・母親がともに職業に就くには、日中の保育者が必要である。その主な人物は、祖父母か保育所等の保育サービスである。母親が職についている比率が都市規模によって違うということは、祖父母の支援や保育サービスの利用の率が都市規模によって違うのだろうか。



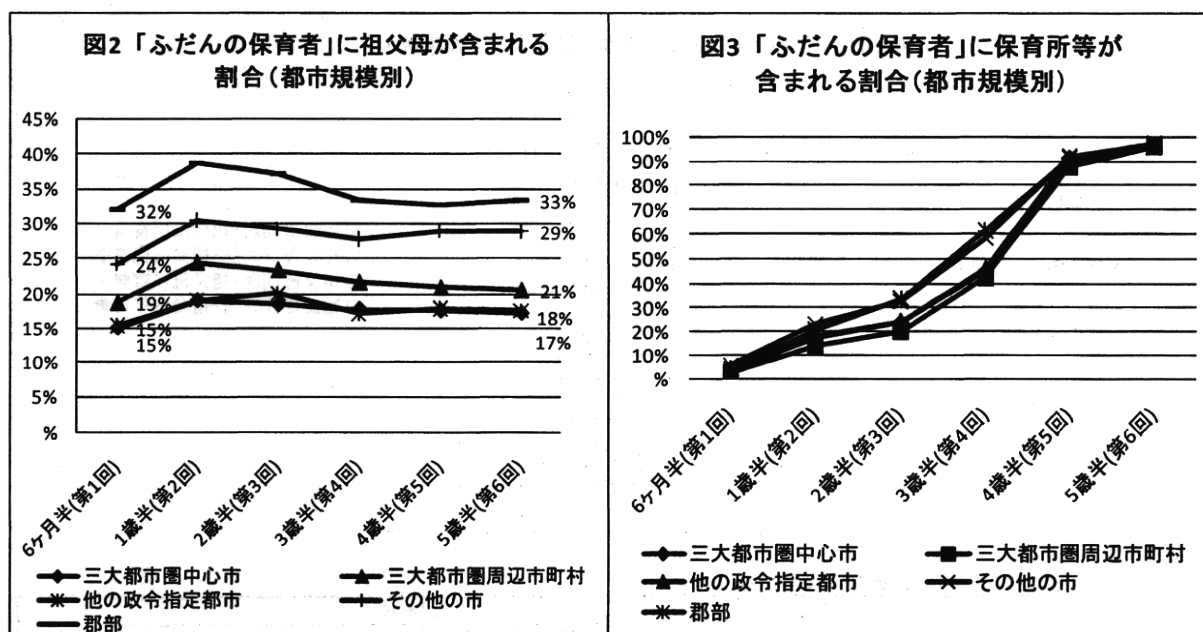


図2を見ると、「ふだんの保育者」に祖父母のどちらか（以下「祖父母」と表記）が含まれる率は、都市規模によって異なることが分かる。三大都市圏の中心市および政令指定都市はほぼ同じで、次に多いのが三大都市圏の周辺市町村、次にその他の市、一番祖父母の支援を得ている率が高いのは郡部である。子供の年齢による変化は、1歳半・2歳半時が若干高いことを除いては、どの都市規模でもほとんど変化が無い。

では、保育所・保育ママ・ベビーシッター（以下保育所等と表記、第4・6回は幼稚園を含む）の利用はどうだろうか。図3を見ると、「ふだんの保育者」に保育所等が含まれる率にも、1歳半から3歳半にかけては都市規模により傾向の違いがある。これらの時点では、大都市部（三大都市圏の中核市および周辺市町村、政令指定都市）よりも、その他の市・郡部で、保育所等の利用率が高い。

これらの情報を、対象児が2歳半の時点でかけあわせてみる。「ふだんの保育者」が母のみになる（つまり保育の支援が得られていない状況）割合が、都市規模毎に最もばらつきがあるのが2歳半の時点なので（図省略）、比較に適していると考えられるからである。まず、職の有無と祖父母がふだんの保育者に含まれる割合との関係を、図4で見る。この図は、それぞれの都市規模での合計は100%だが、右側に有職者、左側に無職者を配している。最も濃い灰色と次に濃い灰色とは、祖父母が「ふだんの保育者」に含まれる、つまり祖父母から保育の支援を得ているケースを表している（数値は表1参照）。三大都市中心市や政令指定都市で比率が低く、三大都市周辺市町村、その他の市、郡部の順に増えていく。ただし、祖父母から支援を得ているケースの中でも、有職率は都市規模によって違う。三大都市中心市では、若干だが無職者の方が多い。三大都市周辺部や政令指定都市ではほぼ拮抗し、その他の市や郡部では、有職者の方が多い。大都市部では、祖父母の支援が得られるからといって、仕事に出られる確率は半分かそれ以下でしかない。

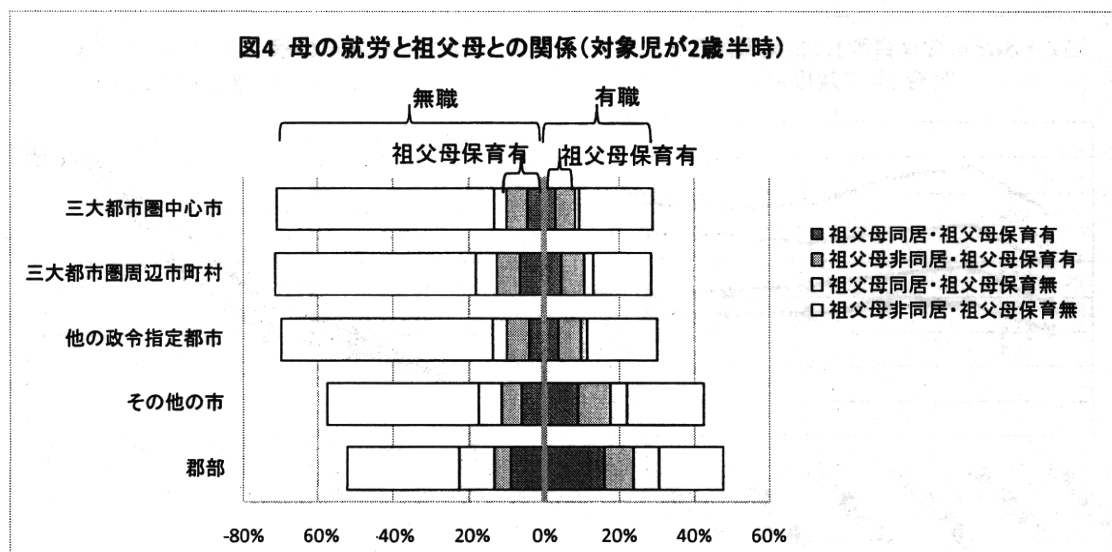


表1 母の就労と祖父母との関係(対象児が2歳半時)

	無職				無職計	有職				有職計
	祖父母同居・祖父母保育有	祖父母非同居・祖父母保育有	祖父母同居・祖父母保育無	祖父母非同居・祖父母保育無		祖父母同居・祖父母保育有	祖父母非同居・祖父母保育有	祖父母同居・祖父母保育無	祖父母非同居・祖父母保育無	
三大都市圏中心市 (n=7244)	5%	6%	3%	58%	71%	3%	5%	2%	19%	29%
三大都市圏周辺市町村 (n=13898)	6%	6%	6%	53%	71%	5%	6%	2%	16%	29%
他の政令指定都市 (n=2279)	4%	6%	4%	56%	70%	4%	6%	2%	19%	30%
その他の市 (n=12555)	6%	5%	6%	40%	58%	9%	9%	4%	20%	42%
郡部 (n=6285)	9%	4%	9%	30%	52%	16%	8%	7%	17%	48%

もう一つ興味深いのは、支援を提供している祖父または祖母（以下「祖父母」）の同居率である。郡部では、支援している祖父母が同居している率の方が高いが、その他の市と三大都市周辺部では同居と別居が拮抗、三大都市中心市や政令指定都市ではむしろ別居の方が多い。つまり、大都市部では、三世代同居でない、近居による祖父母の支援が子育てを支えている割合が高いことになる。

また、グラフの白い部分と最も薄い灰色は、祖父母が「ふだんの保育者」に含まれない、つまり祖父母から保育のまとまった支援を得られていないケースである。その割合は、無職者より有職者の方が低い。しかし、有職者であっても、郡部以外は祖父母の保育支援が無いケースが過半数を占める。郡部でやっと半々である。ちなみに、他の年齢時点を見ても、6ヶ月の時に有職者全体の中で祖父母の保育支援を受けている率が68%である以外は、有職者全体の過半数が祖父母の保育支援を受けることはない。

つまり、子育てしながら職に就いている母親は、相対的には無職の母親よりは祖父母の支援を得ているが、祖父母だけでは日中の保育を代替できていないことがわかる。では、保育所等の利用も合わせるとどうだろうか。

図5では、最も濃い灰色と次に濃い灰色とでは、保育所等が「ふだんの保育者」に含まれるケースの割合を示している（数値は表2参照）。保育所の利用率は前述のように、大都市部よりその他の市・郡部の方が高い。それに加えて、保育所等を利用していないが祖父

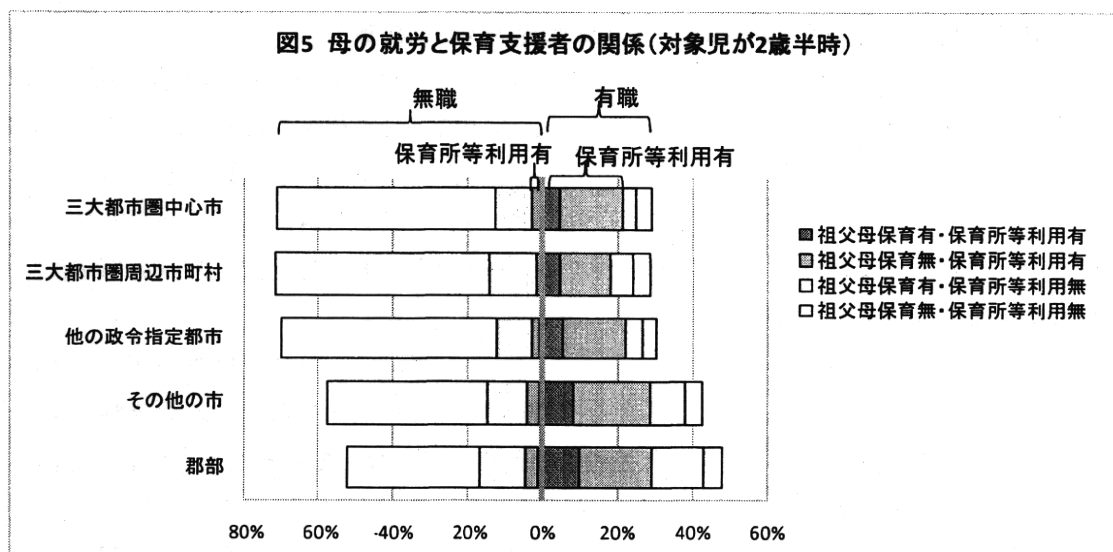


表2 母の就労と保育支援者の関係(対象児が2歳半時)

	無職					有職				
	祖父母保育有・保育所等利用有	祖父母保育無・保育所等利用有	祖父母保育有・保育所等利用無	祖父母保育無・保育所等利用無	無職計	祖父母保育有・保育所等利用有	祖父母保育無・保育所等利用有	祖父母保育有・保育所等利用無	祖父母保育無・保育所等利用無	有職計
三大都市圏中心市 (n=7244)	0%	2%	10%	59%	71%	5%	17%	4%	4%	29%
三大都市圏周辺市町村 (n=13898)	0%	1%	12%	57%	71%	5%	14%	6%	4%	29%
他の政令指定都市 (n=2279)	1%	2%	9%	58%	70%	5%	17%	5%	4%	30%
その他の市 (n=12555)	1%	3%	11%	43%	58%	8%	20%	9%	4%	42%
郡部 (n=6285)	1%	3%	12%	36%	52%	10%	19%	14%	5%	48%

母の保育支援を得られている、というケース(薄い灰色)も、大都市部より、その他の市や郡部で高い。つまり、その他の市や郡部では、保育サービスを利用できる比率も、祖父母の支援を得られる比率も高いことがわかる。ちなみに、両方の支援を得ている比率(最も濃い灰色)も大都市部より高い。

これらのデータからは、図1で示した大都市部→その他の市→郡部の順に母親の有職率が高いという事実は、日中に父親・母親の代わりに保育を担ってもらえる資源がこれらの都市規模順に高くなっていることと関連することが予想される。祖父母と保育サービスのどちらの支援も得ていないケースは都市規模に関わらず4%程度であることも、傍証となる。

なお、7歳時(第7回)では、学齢期に達しているので「ふだんの保育者」の設問は無いが、「祖父母に子育てに大いに協力してもらっている」と答える人の割合は、どの都市規模でも母が無職の場合より有職の場合に高く、大都市部→その他の市→郡部の順で高い(図省略)。特に郡部で母が有職の場合は、54%に上る。ただし、近所の人に協力してもらっている比率はいずれの都市規模でも非常に小さく、傾向の差もない。

都市規模による有職率の差は、祖父母や保育サービスによる保育支援を調達できる割合の差として説明できるのではないか、ということがこの項の結論である。

4. 保育支援の資源から分断される長距離地域移動者

前項では、祖父母や保育サービスという資源の利用可能性が、母の有職率と関連している可能性を示唆した。大都市の場合に祖父母との同居率や近居率が低く、よって支援を得られる率も低いのは、住宅事情や通勤の便の問題によって祖父母との居住地が離れているケースや、他の地域に親を残して転入してきているケースの多さなどが、物理的な理由として考えられる。保育サービスの利用率が大都市部の方が低いことは、昨今の都市部での保育所待機児童の多さとも通底する結果である。

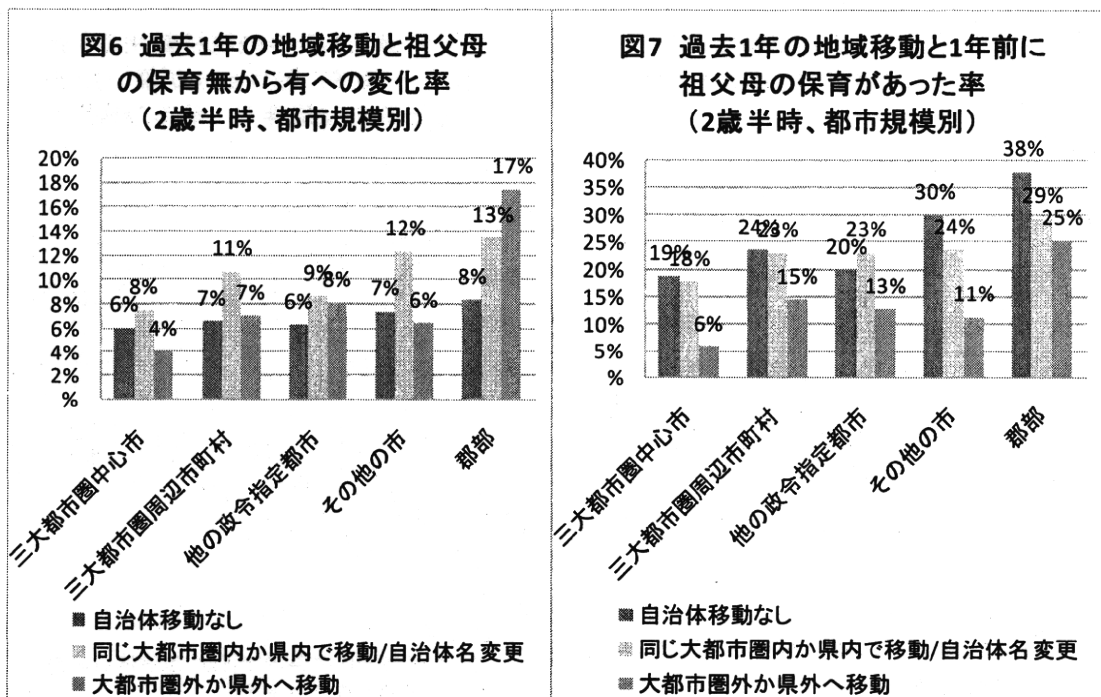
物理的に支援の資源と分断されるという点では、転居、つまり地域移動をすることはそのリスクを高めることが予想される。一方、祖父母の近くにすむために地域移動をするケースも含まれる可能性がある。移動者と資源の関係はどうなっているだろうか。2歳半時の状況を、その前1年間に地域移動をしたか否かによって、分けて集計してみる²。

地域移動は、子育ての条件を良くすることに関連がある場合（それが主な目的であれ副次的であれ）と、子育てとは関係の無い事情で動く場合が考えられる。例えば1歳半の時点で祖父母の支援が得られていなかったケースが、移動後の2歳半の時点では祖父母の支援を得られるようになっていけば、移動は子育ての条件向上に関連するものだったと言えるだろう。1歳半から2歳半の間に地域移動をした人は、1年前の1歳半の時点で祖父母の保育支援を得られていた率が一様に低い（図省略）。このような親子は地域移動することによって祖父母の支援を得ようとしたのだろうか。

図6に示したように、1歳半から2歳半の間に三大都市圏内や県内で移動した場合は、移動に伴ってそれまで得られていなかった祖父母の支援を得られるようになったケースは、自治体移動がなかったケースより若干多い。しかし、三大都市圏外・県外へと長距離移動するようなケースにはそのような効果は見られない。ただし、郡部への長距離移動だけは別である。郡部への移動は、実家へのUターンが含まれる比率が高いのかもしれない。

長距離の地域移動者は、移動後に祖父母の支援を得ている率は、自治体移動が無かった人たちよりもむしろ一様に低い（図7）。他との開きが小さい郡部を除き、地域移動はむしろ子育てとは関係のない事情で起こっているといえよう。長距離移動者は、移動によって（または移動が起こるような職業等の条件にあることによって）祖父母という資源と切り離されていると見ることができるだろう。

² ちなみに、図6～図10の都市規模は、2歳半時の居住自治体である。移動の凡例は、1歳半時から2歳半時の居住自治体の変化を「移動」として示している。なお、これらの図のケース数は、三大都市圏中心市では「自治体移動なし」がn=6179、「圏内・県内移動」がn=784、「圏外・県外移動」がn=171、三大都市圏中編市町村では「自治体移動なし」がn=12657、「圏内・県内移動」がn=794、「圏外・県外移動」がn=255、政令指定都市では「自治体移動なし」がn=1988、「圏内・県内移動」がn=173、「圏外・県外移動」がn=86、その他の市では「自治体移動なし」がn=11391、「圏内・県内移動」がn=517、「圏外・県外移動」がn=404、郡部では「自治体移動なし」がn=5734、「圏内・県内移動」がn=341、「圏外・県外移動」がn=126である。



自治体を越える移動をした場合は、同じ自治体に留まっていた場合（つまり引越をしていない可能性が高い）よりも、母の有職率が低い（図 8）。特に大都市圏（大都市中心市＋周辺市町村）を越える移動や、大都市圏以外の居住者の場合は県を越える移動をした場合は、有職率が大幅に低い。長距離移動者は、1歳半時の父収入が平均より80万円近く高いので母親が専業主婦でやっていけるという可能性もあるが、職に就くために祖父母からの保育支援が得られないために無職でいる可能性もある。有職者の中の保育所等利用率が非移動者よりむしろ高い傾向にあるのだが（図省略）、これは祖父母の支援が得られないことの裏返しかもしれない。

また、「子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない」という悩みは、大都市中心市で高く、次に大都市周辺部や政令都市で高い。その中でも長距離の地域移動者は特にこの悩みを訴える人が多い（図 9）。これらも、前項で検討した祖父母の支援の多寡との関連が考えられる。

加えて、「子育てによる体の疲れが大きい」という悩みも、同じく大都市中心市で高く、次に大都市周辺部や政令都市で高い傾向にある。これは、無職と有職にわけて集計しても同じような傾向になる。特に大都市中心市と政令指定都市に長距離移動してきた人で悩みが強い（図 10）。一方、郡部に長距離移動してきた人はこの悩みが極端に低い。上述のように、Uターンによって祖父母支援が得られたり、保育所の利用もしやすくなったからかもしれない。

以上、地域移動の中でも特に長距離の移動は、祖父母の支援を得ることとは結びついておらず（郡部への移動を除く）、むしろ長距離移動者は祖父母の支援から分断されていると解釈できよう。長距離移動ケースの母の有職率が低いことも、整合性のある結果である。

図8 過去1年の地域移動別の
母の有職率(2歳半時、都市規模別)

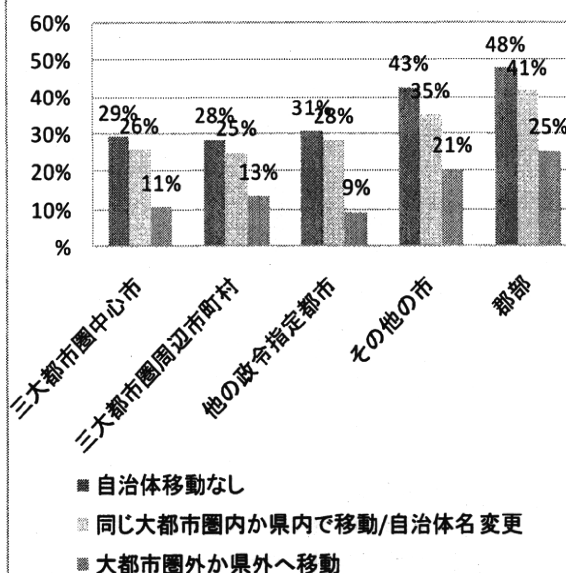


図9 過去1年の地域移動別の「子
供を一時的に預ける先が無い」と答
えた割合(2歳半時、都市規模別)

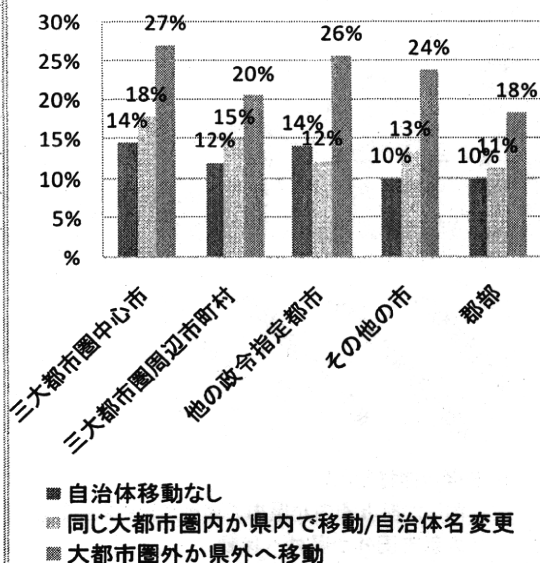


図10 過去1年の地域移動別の「子
育てによる体の疲れが大きい」と答
えた割合(2歳半時、都市規模別)

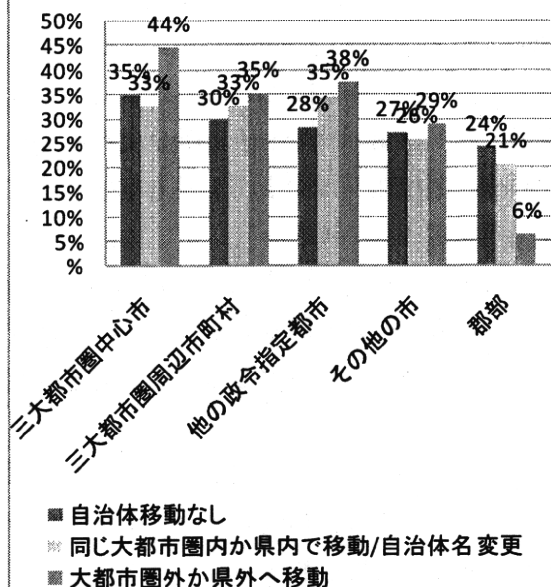
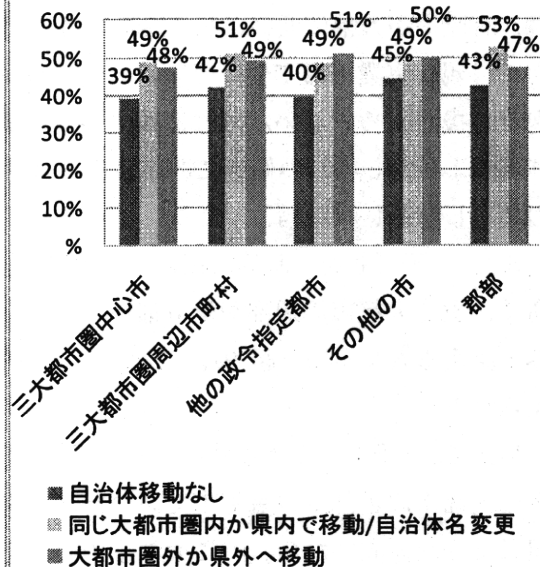


図11 調査対象児のあとに子供が
増えた割合(7歳までの地域移動
別、7歳時都市規模別)



5. 脱落と地域移動について

なお、サンプルの脱落と地域移動の関係について、少々触れておく。21世紀出生児縦断調査の第7回までの脱落および転居については、詳しくは(西野、2010)で分析したが、第1回の都市規模による脱落の発生の差はほぼない。つまり、都市部の返送率が悪いということは、この調査については観察されていないことになる。ただ、脱落したサンプルに

は、ひとり親など支援を必要とすると考えられるケースが多い。都市規模という一般論ではなく、むしろ都市規模に関わらず支援が必要な層のデータが抜け落ちてきた可能性がある。

また、21世紀出生児調査は郵送調査であり、転居時の転居先把握は対象者の自発的な連絡に依拠しているため、転居によって住所が不明となって脱落する可能性は高い。だが、第1回から第7回の間に、つまり調査対象児が7歳になるまでに自治体を越える移動を経験した親には、移動なしの場合に比べて、この7年間に子供が増えているケースが多い(図11)³。家族形成期の初期にある家族は、転職の可能性があったり、よりよい住環境を求めたりと、転居の可能性が高いことを反映していると考えられるが、少子化対策の点からも、移動者の脱落を防ぎ、データを確保できるようにする工夫が必要だと考える。

6. 分析結果のまとめ

本稿の分析では、都市規模により、母親の就業率および祖父母の保育支援の率に差があることを示した。都市規模によって祖父母との居住距離の傾向には違いがあることが予想され、就業の際に祖父母を保育支援の資源として頼ることができるか否かも都市規模によって違ってくるのが関係すると考えられる。それぞれの都市規模で、有職者の間では祖父母と保育所等とが補完しあっている関係も読み取れた。保育所を利用できる人数には限りがあるので、結局母親の就業率は、保育所を利用できない場合に祖父母の支援をどれだけ調達できるか、ということと関連すると考えられる。これらのことは新しい視点ではないが、データの裏付けを得られたことには一定の意味があろう。

祖父母と物理的に長距離に離れて暮らす場合、祖父母の支援は調達できない。そのことを反映するかのように、地域移動をする人は祖父母の支援が得られず、また母親の有職率が低いこともわかった。特に三大都市圏と非大都市圏をまたいだり、非大都市圏の中で県をまたぐような長距離の移動をする人、中でも三大都市圏の中心市に長距離移動してくる人たちには、祖父母の支援・一時預け先などの援助資源が少ない傾向がみられる。子育てによる身体の疲れを訴える有職の母の割合も高い。

都市規模による母親の就業率・就業時期の差は、分解していくと、親族などの資源を日常的に利用できるかどうかの差といえる面があることを、これらの結果は示唆する。親族や知人などの資源から分断されやすい移動者に一時預け先の悩みが見られることも、傍証となろう。政策的な含意として、転勤者や、地方出身者が大都市で家族形成をしているケースなど、親族資源を活用できないケースには、保育サービスの厚い配分も必要ではないだろう。

³ 図11のケース数は、三大都市圏中心市では「自治体移動なし」がn=4042、「圏内・県内移動」がn=1609、「圏外・県外移動」がn=519、三大都市圏中編市町村では「自治体移動なし」がn=7948、「圏内・県内移動」がn=3255、「圏外・県外移動」がn=904、政令指定都市では「自治体移動なし」がn=1133、「圏内・県内移動」がn=578、「圏外・県外移動」がn=285、その他の市では「自治体移動なし」がn=7637、「圏内・県内移動」がn=4648、「圏外・県外移動」がn=1433、郡部では「自治体移動なし」がn=1560、「圏内・県内移動」がn=935、「圏外・県外移動」がn=176である。

なお、図 4 を見ると、祖父母の支援を得られている人の中でも、大都市部では有職と無職の比率がほぼ半々なのに対し、その他の市や郡部では有職の割合の方が高い。また、三大都市の周辺市町村は、大都市部の中でも祖父母の保育支援が少しだけ多いのだが、有職率は三大都市圏中心市や政令指定都市とほぼ変わらない。同じような支援資源が得られても、職への就きやすさは地域によって異なる可能性がある。今回ほとんど検討しなかった職に就くことへのニーズの地域差も含めて、都市規模による子育てと就業の両立事情の違いを、機会があれば今後一層掘り下げたい。

また、前述のように脱落者には支援が必要なケースが含まれやすいとともに、脱落と移動は密接な関係にある。移動者には子供が増えているケースが多く、少子化対策の点からは、移動者のデータ確保は重要であろう。パネル調査の継続にあたっては、脱落者に復活を促し、移動者を追跡する手立てを、積極的に検討すべきだろう。

(引用文献)

- 西野淑美(2008)「出産後再就労のタイミングと促進要因のイベントヒストリー分析」『厚生労働科学研究費補助金統計情報高度利用総合研究事業「パネル調査(縦断調査)に関する総合的分析システムの開発研究」平成 19 年度報告書』
- 西野淑美(2010)「第 1 - 7 回 21 世紀出生児縦断調査の脱落・移動の動向および子育て感の都市規模別変化」『パネル調査(縦断調査)に関する総合的高度統計分析システムに関する開発研究 平成 20-21 年度総合研究報告書』pp75-86
- 立山徳子(2005)「首都圏都市空間における「近代家族」の在り処」『季刊家計経済研究』66、pp21-31
- 由井義通他(2004)『働く女性の都市空間』古今書院

8 子ども観と教育方針

——主として「第7回出生児縦断調査」の分析より——

元森 絵里子

1. 本稿の目的

筆者は、過去3年間の報告書において、「21世紀出生児縦断調査」（以下、出生児調査）の第3回問14「平成13年1月／7月生まれのお子さんはどのような子に育て欲しいと思いますか。次のうち、特に重視したいもの5つまでを選んでその番号に○をつけてください」という設問の回答傾向（図1）を用いて、全ケースを4つの子ども観を持つグループに分け、それぞれの属性や育児方針や教育行動の違いを分析してきた（元森2008、2009、2010）。

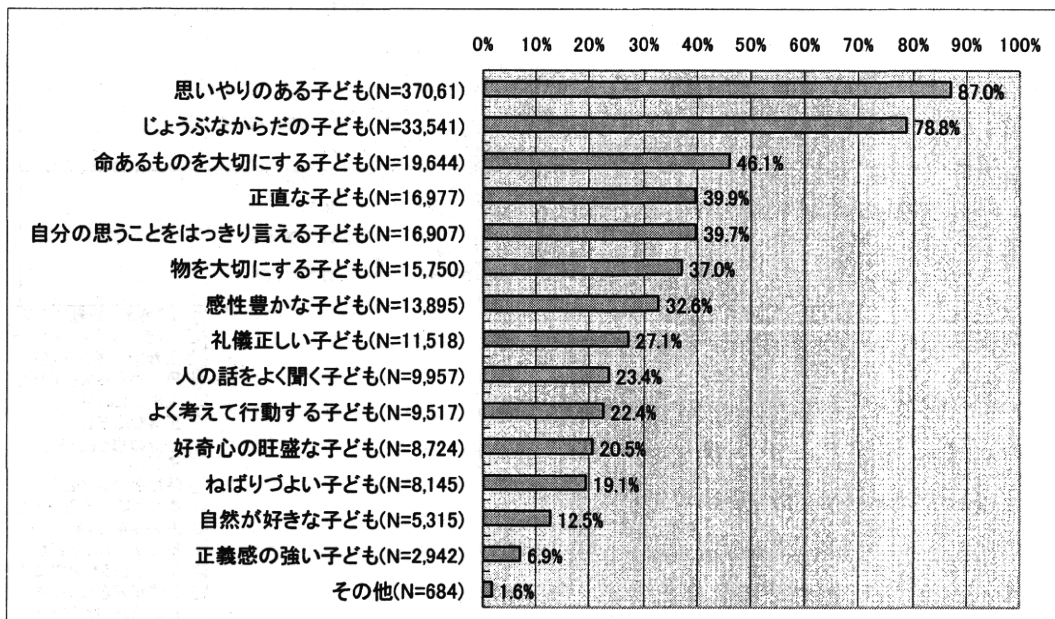


図1 第3回問14単純集計（多重回答）

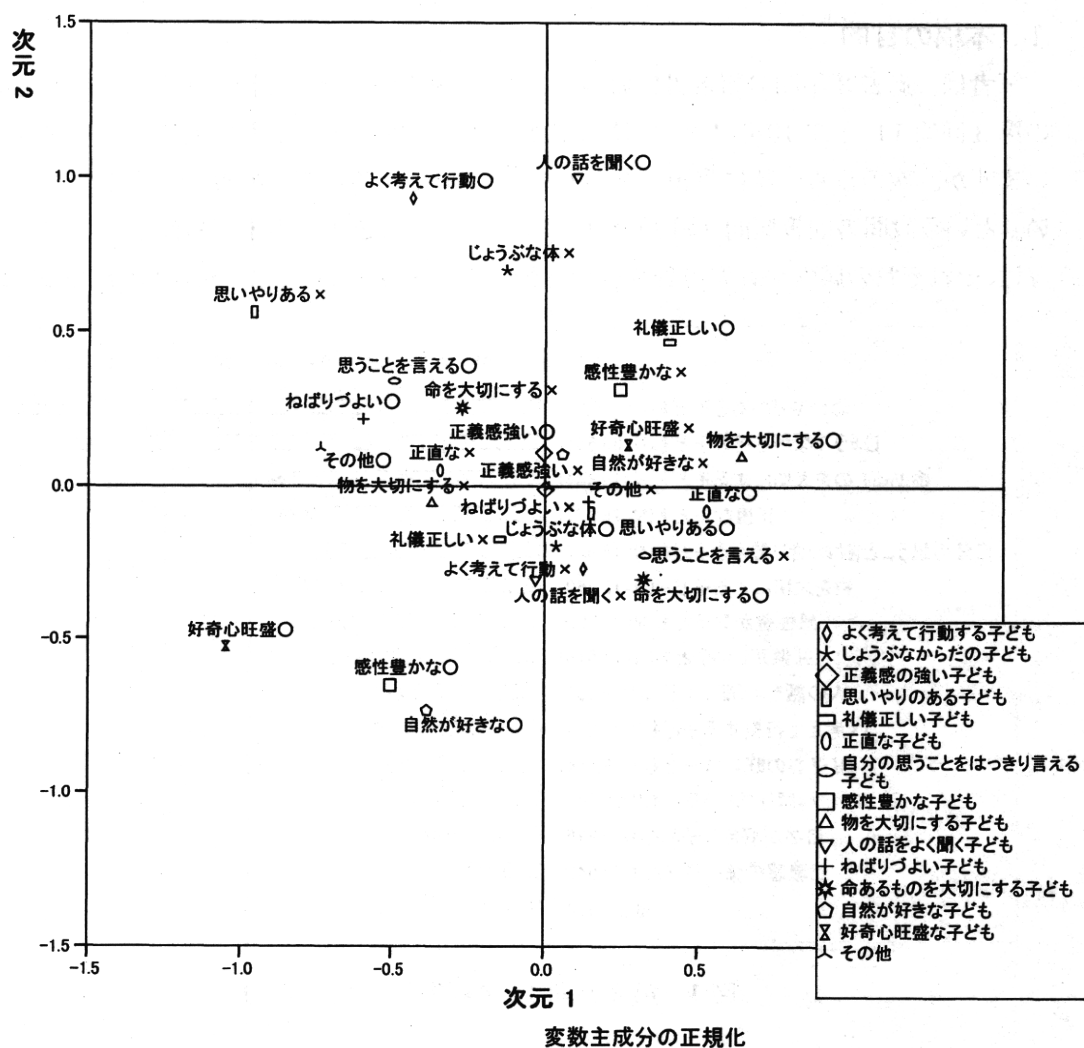
本稿では、プロジェクトの区切りであることを鑑み、まず、2.で未就学時点の第6回までを分析した前回までの報告内容を簡単に要約する。その上で、3.以下では、小学1年生時の調査となる第7回調査から、親の子ども観によって、就学後の教育方針（3.）や子ども自身の生活や学習行動（4.）、「子どもについての悩み」（5.）に差異があるかを検討する。

2. 第1回～第6回調査から

2.1 子ども観の4分類

グループ分けは、SPSSを用いたコレスポンデンス分析で析出された2軸を元に行った（図2、表1、表2）。第1軸は、他者との協調や調整的な行動を支持する傾向と、自発的で積極

的な行動を支持する傾向（調整－積極軸）、第2軸は、知性を重視する傾向と感性を重視する傾向（知性－感性軸）からなると解釈できる。それによってできる4グループは、子ども観研究が明らかにした「近代子ども観」に照らし合わせて、図3のようにも見なすことができる（元森 2008）。



※図中の表記は略したもの。各項目○＝該当／×＝非該当を示す。

図2 第3回問14の多重コレスポンデンス分析（カテゴリーの布置図）

表1 第3回問14の多重コレスポンデンス分析（固有値とイナーシャ）

モデルの要約

次元	Cronbach のアルファ	説明された分散		
		合計(固有値)	イナーシャ	分散の%
1	.334	1.454	.097	9.691
2	.275	1.345	.090	8.966
総計		2.799	.187	
平均値	.306 ^a	1.399	.093	9.328

a. Cronbach のアルファ平均値は、固有値平均値に基づいています。

表 2 第 3 回問 14 の多重コレスポネンセス分析 (数量化得点)

一次元		二次元	
物を大切にする○	0.640	人の話を聞く○	1.002
正直な○	0.526	よく考えて行動○	0.932
礼儀正しい○	0.402	じょうぶな体×	0.701
思うことを言える×	0.325	思いやりある×	0.561
命を大切にする○	0.321	礼儀正しい○	0.468
好奇心旺盛×	0.269	思うことを言える○	0.341
感性豊かな×	0.243	感性豊かな×	0.314
思いやりある○	0.149	命を大切にする×	0.255
ねばりづよい×	0.141	ねばりづよい○	0.217
よく考えて行動×	0.125	好奇心旺盛×	0.135
人の話を聞く○	0.101	その他○	0.124
自然が好きな×	0.055	正義感強い○	0.110
じょうぶな体○	0.035	自然が好きな×	0.104
その他×	0.012	物を大切にする○	0.097
正義感強い×	0.000	正直な×	0.052
正義感強い○	-0.006	その他×	-0.002
人の話を聞く×	-0.031	正義感強い×	-0.008
じょうぶな体×	-0.128	ねばりづよい×	-0.051
礼儀正しい×	-0.148	物を大切にする×	-0.056
命を大切にする×	-0.272	正直な○	-0.079
正直な×	-0.345	思いやりある○	-0.087
物を大切にする×	-0.373	礼儀正しい×	-0.172
自然が好きな○	-0.387	じょうぶな体○	-0.194
よく考えて行動○	-0.438	思うことを言える×	-0.222
思うことを言える○	-0.497	よく考えて行動×	-0.266
感性豊かな○	-0.505	命を大切にする○	-0.301
ねばりづよい○	-0.599	人の話を聞く×	-0.304
その他○	-0.741	好奇心旺盛○	-0.528
思いやりある×	-0.961	感性豊かな○	-0.654
好奇心旺盛○	-1.050	自然が好きな○	-0.733

※表中の表記は略したもの。各項目○＝該当／×＝非該当を示す。

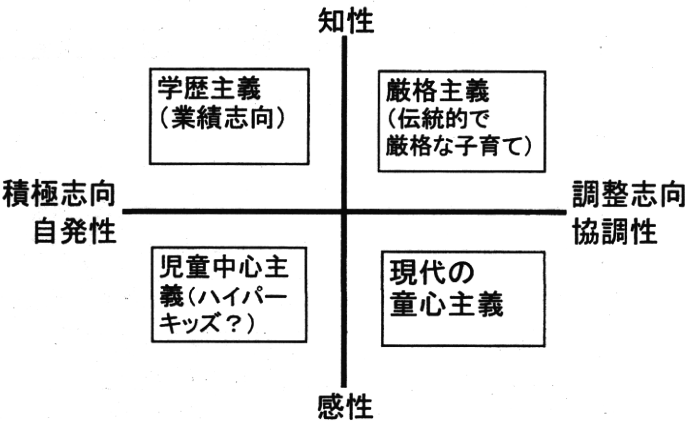


図 3 「出生児縦断調査」における子ども観の 4 分類

大正期の新中間層から出現し、現代においても広く共有されている「教育家族」の子ども観について、広田照幸（1999）が、沢山美果子（1990）の議論に修正を加えながら3つの「（教育的配慮）」に関する心性を併せ持っている述べている。すなわち、子どもの純真さや無垢を賛美する「童心主義」、早くから厳しくしつけや道德教育を行って規律を身につけさせようとする「厳格主義」、知識を習得させ学歴をつけさせようとする「学歴主義」である。ただ、子どもの純真さや無垢さ、大人にはない子どもらしい感性などを尊重する、いわゆる「童心主義」に対して、しばしば混同されるものとして、欧米の「児童中心主義」の教育運動の影響を受けた、子どもの自発性や積極性を強調する思潮がある。後者の児童中心主義の側面は、中心的思想家であるデューイの理論が、より効率的な学習のための手段の側面を持っていたように（Dewey 1990）、「詰め込み」を批判しながらも、よりいっそう強力に業績性へと子どもを導こうとする意図とも矛盾しない。したがって、広田の分類は、「厳格主義」「学歴主義」「童心主義」「児童中心主義」の4つに書き換え可能である。

そして、これらは、出生児縦断調査から析出された4つの子ども観と整合的に解釈できるのではなかろうか。すなわち、「知性×調整」は、道德・しつけに関する知を重視する厳格主義、「知性×積極」は、子ども自身による知識の獲得を強調する学歴主義（より一般的な言い方をすれば業績主義）、「感性×積極」は、何事においても子どもの自発性と感性を重視する児童中心主義、「感性×調整」は、周囲に調和した子どもらしさを重視する童心主義と見なすことができる。そのことを示したのが図3である。

2.2 子ども観の担い手

さらに、その規定要因を家族の属性や子ども側の要因に探ると表3のようになる（元森2008）。すなわち、「知性×調整」は、保守的ないし階層的に劣位と見られる層を担い手とする。同様に、「知性×積極」は、エリートで父母の年齢が高めの層、「感性×積極」は、都市部で母親が常勤職など時代の先端をいく層、「感性×調整」は、専業主婦家庭で若く小さい子どもの多い層に多く見られる。

表3 子ども観4分類の規定要因

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
子どもの性別	女兒	男児		女兒
子どもの成長*		特に成長が早い	成長が早い	
兄弟	兄弟あり		兄弟なし	
弟妹				弟妹あり
多胎児か否か				三つ子
祖父母との同居	祖父母と同居	祖父母と別居 (別居の場合、祖父母との行き来が頻繁であるほど調整志向)		
都市規模*	郡部		13大都市	
住居携帯	一戸建て		集合住宅	
母親の職業			母常勤	母主婦
父親の職種	父(母)職業威信低い	父(母)職業威信高い		
父母の収入		父母の収入高い		
父母の学歴	父母高卒以下	父母高等教育以上		父母高卒以下
父親の年齢		父40代以上		父30代
母親の年齢		母30代後半以上		母30代前半以下
回答者	母が回答	父が回答		母が回答

※*印は、ロジスティック回帰分析では有意ではなかった

2.3 子ども観と育児方針・教育行動

次に 4 類型ごとに、以下の点に注目し、しつけの仕方や育児方針、教育行動に差異がないか見てみた（元森 2008、2009、2010）。それをまとめたのが表 4 である。

① しかり方

- ・ 第 4 回問 16「お子さんが悪いことをした場合どのように対応していますか」（元森 2008）

② 育児方針（意識・配慮していることと）

- ・ 第 1 回問 9「子育てで意識して行っていること」
- ・ 第 2 回問 4「食事で気をつけていること」
- ・ 第 3 回問 6「おやつについて家庭で気をつけていること」
- ・ 第 4 回問 13「健康に関することで意識して行っていること」
- ・ 第 5 回問 4「遊びについて意識していること」
- ・ 第 6 回問 10「食事時に特に気をつけていること」（以上、元森 2009）

③ 教育行動（お手伝いや習い事）

- ・ 第 6 回問 11「お子さんに、次のようなお手伝いをさせていますか」
- ・ 第 3 回～第 6 回の「お子さんは現在、習い事をしていますか」（以上、元森 2009）

④ 親子のコミュニケーション

- ・ 第 2 回問 14「平成 13 年 1/7 月生まれのお子さんと遊んだり、食事をしたりして一緒に過ごす時間は、通常 1 日平均どのくらいですか」（元森 2010）

⑤ テレビとの関わり

- ・ 第 6 回問 8「平成 13 年 1/7 月生まれのお子さんのテレビの見方についてどのような関わり方をしていますか」

⑤ しつけ

- ・ 第 4 回問 14「平成 13 年 1/7 月生まれのお子さんのしつけ状況をおたずねします。以下の①～③の各項目のすべてについて『しつけの状況』『お子さんの状態』別にそれぞれあてはまる番号ひとつに○をつけてください」の「しつけの状況」（元森 2010）

表 4 子ども観の子育て方針・行動への影響（就学前まとめ）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
しかり方	有無を言わずしかる	有無を言わずしかる	コミュニケーションでわからせる	コミュニケーションでわからせる
育児方針(意識・配慮)	手薄	活発重視	すべてで配慮	衛星・健康重視
教育行動(幼児期)	家事手伝い	お手伝いより知育	コミュニケーション系お手伝いと情操教育	お手伝いも習い事もそこそこさせる
コミュニケーション	食事・風呂などで多い	全体的に少ない(読み聞かせ除く)	全体的に多い	一緒に過ごす
しつけ	熱心	そうでもない	そうでもない	熱心
テレビ	時間や内容にルーズ	時間や内容に厳しいが、コミュニケーションは少ない	時間や内容に厳しい	コミュニケーションをよくする

それによれば、4つのグループの特徴は次のようにまとめられる。

「知性×調整」は、「伝統的な」しつけには熱心で、それに関連した子どもとの関わりもあり、家事手伝いなどもさせるが、生活時間やテレビの時間などに注意する意識は薄く、コミュニケーションをとったり子育てで多くのことに配慮したりといった志向は希薄な傾向がある。

「知性×積極」は、しつけやお手伝いにもコミュニケーションにも重きを置かず、知育に熱心で、子どもが活発であることを望む傾向がある。生活時間等には気を配っている。

「感性×積極」は、いわゆるしつけには熱心でないように見えるが、子育て全般で意識が高く子どもに細かく配慮する傾向がある。また、コミュニケーションを重視しており、子どもの自発性を重視したり情操教育を重視したりする傾向もある。

「感性×調整」は、全般的にやや熱心という傾向が見られる。しつけもコミュニケーションも比較的重視し、衛生や健康面を中心に子どもに気を配り、子どもと一緒に何かをする時間も大切にしている傾向がある。極端な傾向はないが、お手伝いや習い事もそれなりにさせる傾向がある。

このような傾向は、子ども観研究に引きつけた、「厳格主義」「業績主義」「児童中心主義」「童心主義」という各グループの性格づけを、さらに裏づけるものとなっているよう。

2.4 子ども観の子どもへの影響

最後に、以上のような結果が、子どもの側にどのような影響を及ぼしているかを、以下の点に注目して分析した（元森 2010）。結果をまとめたのが、表5である。

① しつけ

- ・ 第4回問14「平成13年1/7月生まれのお子さんのしつけ状況をおたずねします」の「お子さんの状態」

② テレビ・ゲーム

- ・ テレビの視聴時間（第3回問8補問2、第4回問7補問1、第5回問5、第6回問8）
- ・ コンピュータゲームで遊ぶ時間（第4回問7補問2、第5回問6、第6回問8）

③ 睡眠

- ・ 起床時間と就寝時間（第2回～4回、第6回）

④ 基本的生活習慣

- ・ 第5回問4補問3(4)「その他の生活の状況についておたずねします」

⑤ 遊び：

- ・ 第2回問6(2)「どんな遊びが多いですか」
- ・ 第3回問8(1)「お子さんはふだんどのような遊びが多いですか」

⑥ 子の親とのコミュニケーション

- ・ 第6回問12「平成13年1/7月生まれのお子さんはふだん、お父さんやお母さんにどのように接してきますか」

⑦ 情動や社会性の発達

- ・ 第6回問13「平成13年1/7月生まれのお子さんの行動についてお尋ねします」

表5 子ども観の子どもへの影響（就学前まとめ）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
しつけ	伝統的な項目が特に身につく	しつけが比較的身についていない	自他の区別が特に身につく*	他者との社交が特に身についている
テレビ・ゲーム	テレビとゲームの時間が長い	テレビの時間が短い	テレビもゲームも短い	ゲームは幼時にやらないがテレビは適度に見る
睡眠	極端な早寝早起きか不規則→遅寝か不規則	早寝早起き→遅起き傾向	不規則が少なく、やや早寝早起き	遅寝遅起き→適度な時間の就寝起床
基本的生活習慣	基本的なしつけが特に身につく	全体的に比較的身についていない傾向	やや身についていない傾向	(特徴少)
遊び(遊びの種類、遊び場、遊び相手)	伝統的な遊び→遊びが少ない傾向、	活発な遊びはするが、情操にいい遊びはしない傾向・テレビは見ない	道具を使わず情操に役立ち自然な遊び→どの遊びもよくやる傾向	ビデオ・テレビ→情操による遊びと生き物と触れ合う遊びが多い傾向
	遊び場に多様性がなく無頓着な傾向?	遊び場に多様性がない	多様な場所で遊ぶ	多様な場所で遊ぶ
	友達よりきょうだい	一人遊び	きょうだいより同い年の友達	ひとりやきょうだいより多様な年齢の友達
子の父母へのコミュニケーション	親との会話が少ないケースが少ないが、一緒に遊んだり触れ合ったり疑問を質問したりは控えめ	コミュニケーションが全体的に少ない傾向	疑問を質問したり親との身体的なふれあいを望む	親に話したり一緒に遊んだりするが、友達のはねだらない
情動面や社会性の発達	ねばり強さが足りない傾向	感情コントロールと他者との交流が少ない傾向	根気強さが特にある傾向*	情動と他者との協調が特にできる傾向

※ *印は、子ども観や育児方針と一致しない傾向。

これによれば、明らかに子ども観グループによって、子どもの行動や発達に差異が見られた。そして、それは、親の子ども観（どんな子に育ててほしいか）と、育児方針やしつけの仕方に、かなり対応したものであった。

仮に、しつけは身につけた方がよく、テレビやゲームはやらない方がよく、睡眠は早寝早起きがよく、遊びは多様な遊びを多様な仲間と多様な場所で遊んだ方がよく、親とのコミュニケーションは密な方がよく、基本的な生活習慣や情動・社会性は身についた方がよいという、常識的な価値判断を基準とするならば、「知性」志向のグループは問題が多く、「感性」志向のグループは比較的良好な結果に結びついていると判断できる。

「知性×調整」は、テレビや睡眠や遊びに無頓着な親の志向が表れており、「感性×調整」は、テレビも適度に見せるが、他者とのふれあいや社交を重視する傾向を反映している。

「知性×積極」は、情動やコミュニケーションを重視しない親の志向を反映しているのか、幼児期の諸項目においては全般的に「よい」とは言いづらい傾向を示している。

また、興味深いのは「感性×積極」で、何事にも配慮する親の方針を反映してか、かなりの項目で「よい」と見えるような結果を示している。とりわけ、しつけや発達に関して、親が意図していない点も結果が出ている。

2.5「第7回出生児縦断調査」

以上のように前回までの分析で、基本的に子ども観が親の子育ての意識や態度・行動に影響し、それは、また子どもの発達や行動にも影響している様子が明らかになった。第6回は、ちょうど小学校就学前の最後の調査にあたる。したがって、ここまでの分析で、就学前における大まかな見取り図を得られたことになる。以降、就学後初めての調査となる

第7回調査の分析を進めたい。

「出生児調査」は、2001年1月と7月生まれのサンプルに対し、第6回までは、生後半、1年半、2年半…と1年おきに調査を行ってきた。第7回調査は、調査時点での学齢をそろえるために、第6回調査から1年半あいた満7歳の誕生日（小学1年生在学中）に行われている。すなわち、2001年1月生まれのサンプルに対しては2008年1月、7月生まれのサンプルに対しては同年7月に調査がなされている。したがって、小学1年生時点での親の教育方針と、子ども自身の生活習慣や学習習慣を見ることができる。

すでに、就学前までの分析からも、子ども観の2軸のうち、知性重視か感性重視かの差異が、特に親の意識にも子ども自身にも影響を与えていることがわかっている。この差異が、知育が重要になってくる小学校就学によっても維持されるのか。以下では、親の学校や学習への関わりを聞いた設問と、子どもの生活や学習状況を尋ねた設問、子どもについての悩みの回答傾向を、子ども観の4分類を比較しながら分析し、前回までの分析を引き継ぐ。

なお、第7回の回答者のうち、子ども観の各類型の内訳は表6のとおりである。

表6 第7回調査における子ども観の4分類の内訳

	度数	パーセント
知性×調整	9,540	26.3
知性×積極	8,144	22.4
感性×積極	9,229	25.4
感性×調整	9,394	25.9
合計	36,307	100.0

3. 子ども観と教育方針

3.1 親の学校への関わり

まず、親の側が子どもの教育にどの程度関わっているのか見ていきたい。

問7は、「平成13年生まれのお子さんのお母さんやお父さんと学校との関わりについておたずねします」として、学校行事への参加の度合いを聞いている（表7）。

お母さんでは、「学校行事に出席している」（①-1）で、「知性×積極」が「よくある」が少なく、「ときどきある」が多い。「感性×調整」は「ほとんど・まったくない」が少ない。「保護者の活動に参加している」（①-2）では差異は見られない。「先生と話す機会がある」（①-3）では、「感性」型は「ほとんど・まったくない」が多く、「感性×調整」は特に「よくある」が少ない。「知性」型は逆に「ほとんど・まったくない」が少なく、「知性×調整」では特に「時々ある」が多い。

「知性」型は先生とコミュニケーションをとり、「知性×調整」はとりわけそうである。

「感性」型は先生とのコミュニケーションには消極的だが、「感性×調整」は学校行事に参加していないわけではない。

お父さんでは、「学校行事に出席している」（②-1）で、「知性」型では「ほとんど・まったくない」が多く、「知性×調整」で「よくある」が少なく、「知性×積極」で「とき

どきある」が少ない。逆に「感性」型では「ほとんど・まったくない」が少なく、「感性×調整」で「よくある」が多い。「保護者の活動に参加している」(②-2)では、「知性×積極」で「ときどきある」が少ない。「先生と話す機会がある」(②-3)では、「感性×調整」で「よくある」「ときどきある」とも少なく、「ほとんど・まったくない」が多い。

「知性」型は学校行事には参加せず、「知性×積極」は保護者の活動にも参加しない傾向がある。「感性」型は学校行事への参加に消極的ではなく、「感性×調整」では熱心とすら言えるが、このタイプは先生とのコミュニケーションは消極的傾向がある。

わずかな傾向であるが、父母とも、「知性」型の方がコミュニケーションはとるが行事には熱心ではなく、「感性」型は逆と言える。

表7 子ども観と親の学校とのかかわり方

①お母さんと学校との関わり方

②お父さんと学校との関わり方

①-1授業参観、運動会、学芸会等の学校行事に出席している

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくない	不詳	合計
知性×調整	9,032 95.3%	402 4.2%	27 0.3%	20 0.2%	9,481 100.0%
知性×積極	7,620 94.2%	418 5.2%	25 0.3%	27 0.3%	8,090 100.0%
感性×積極	8,733 95.0%	404 4.4%	23 0.3%	35 0.4%	9,195 100.0%
感性×調整	8,912 95.3%	407 4.4%	14 0.1%	22 0.2%	9,355 100.0%
合計	34,297 95.0%	1,631 4.5%	89 0.2%	104 0.3%	36,121 100.0%

②-1授業参観、運動会、学芸会等の学校行事に出席している

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくない	不詳	合計
知性×調整	2,166 24.1%	5,462 60.7%	1,256 14.0%	118 1.3%	9,002 100.0%
知性×積極	1,918 25.0%	4,566 59.5%	1,069 13.9%	125 1.6%	7,678 100.0%
感性×積極	2,227 25.4%	5,394 61.4%	1,036 11.8%	123 1.4%	8,780 100.0%
感性×調整	2,326 26.1%	5,432 61.1%	1,022 11.5%	117 1.3%	8,897 100.0%
合計	8,637 25.1%	20,854 60.7%	4,383 12.8%	483 1.4%	34,357 100.0%

①-2PTA、学校ボランティア等の保護者の活動に参加している

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくない	不詳	合計
知性×調整	4,529 47.8%	3,476 36.7%	1,436 15.1%	40 0.4%	9,481 100.0%
知性×積極	3,865 47.8%	2,910 36.0%	1,264 15.6%	51 0.6%	8,090 100.0%
感性×積極	4,346 47.3%	3,384 36.8%	1,420 15.4%	45 0.5%	9,195 100.0%
感性×調整	4,456 47.6%	3,469 37.1%	1,383 14.8%	47 0.5%	9,355 100.0%
合計	17,196 47.6%	13,239 36.7%	5,503 15.2%	183 0.5%	36,121 100.0%

②-2PTA、学校ボランティア等の保護者の活動に参加している

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくない	不詳	合計
知性×調整	610 6.8%	2,248 25.0%	6,006 66.7%	138 1.5%	9,002 100.0%
知性×積極	507 6.6%	1,794 23.4%	5,222 68.0%	155 2.0%	7,678 100.0%
感性×積極	556 6.3%	2,131 24.3%	5,943 67.7%	150 1.7%	8,780 100.0%
感性×調整	605 6.8%	2,170 24.4%	5,984 67.3%	138 1.6%	8,897 100.0%
合計	2,278 6.6%	8,343 24.3%	23,155 67.4%	581 1.7%	34,357 100.0%

①-3上記以外で先生と話す機会がある

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくない	不詳	合計
知性×調整	1,239 13.1%	3,881 40.9%	4,306 45.4%	55 0.6%	9,481 100.0%
知性×積極	1,063 13.1%	3,238 40.0%	3,715 45.9%	74 0.9%	8,090 100.0%
感性×積極	1,125 12.2%	3,590 39.0%	4,412 48.0%	68 0.7%	9,195 100.0%
感性×調整	1,106 11.8%	3,680 39.3%	4,513 48.2%	56 0.6%	9,355 100.0%
合計	4,533 12.5%	14,389 39.8%	16,946 46.9%	253 0.7%	36,121 100.0%

②-3上記以外で先生と話す機会がある

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくない	不詳	合計
知性×調整	132 1.5%	732 8.1%	7,958 88.4%	180 2.0%	9,002 100.0%
知性×積極	108 1.4%	620 8.1%	6,762 88.1%	188 2.4%	7,678 100.0%
感性×積極	109 1.2%	696 7.9%	7,768 88.5%	207 2.4%	8,780 100.0%
感性×調整	94 1.1%	656 7.4%	7,973 89.6%	174 2.0%	8,897 100.0%
合計	443 1.3%	2,704 7.9%	30,461 88.7%	749 2.2%	34,357 100.0%

※クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

3.2 親の家庭学習への関わり

次に、問 13 では、「平成 13 年生まれのお子さんのお母さんやお父さんの家庭学習（宿題を含む）への関わり方についておたずねします」と、父母の家庭学習への関わりを見ている（表 8）。

お母さんとお父さんでやや異なった傾向がみられる。

お母さんでは、「勉強をするように言っている」（①-1）のは、「知性×調整」である。「よくある」が多く、「ときどきある」「ほとんど・まったくない」が少ない。逆に、「感性×積極」は、「よくある」が少なく、「ほとんど・まったくない」が多い。「感性×調整」は、「ときどきある」が多い。口で勉強を促す「調整」型に対し、「感性×積極」は口出ししない傾向が高い。「勉強する時間を決めて守らせる」（①-2）では、「知性×調整」で、「ときどきある」が多く「ほとんど・まったくない」が少ないのに対し、「感性×積極」では、「よくある」少なく「ほとんど・まったくない」が多い。「感性×調整」は、「よくある」が多い。時間を守らせる「調整」型に対し、「感性×積極」はここでも介入はしない傾向が高い。口で言ったり、時間を守らせたりといったしつけの色合いの違い勉強への関与は、「調整」型が熱心である。「感性×積極」はあまり熱心でない。

「勉強を見ている」（①-3）では、「知性×積極」で「ほとんど・まったくない」が多いが、「感性×調整」は、「よくある」が多く「ほとんど・まったくない」が少ない。「感性×積極」は、「よくある」が少ない代わりに「ときどきある」が多い。また、「勉強をしたか確認している」（①-4）では、「知性×積極」で「よくある」が少ないのに対し、「感性×調整」で「よくある」が多い。「感性×積極」は「ほとんど・まったくない」が多い。つまり、勉強を見ていたり確認したりといった勉強をめぐるコミュニケーションは、「感性×調整」が熱心で、「知性×積極」が消極的と言える。

お父さんでは、「勉強をするように言っている」（②-1）では、「知性×調整」は、「ときどきある」が多く「ほとんど・まったくない」が少ない。「知性×積極」は、「よくある」が多く、「感性」型は両方とも、「ほとんど・まったくない」が多い。勉強するように口で言う「知性」型、言わない「感性」型となっている。「勉強する時間を守らせる」

（②-2）は、「知性×調整」で、「ときどきある」が多く「ほとんど・まったくない」が少なく、「知性×積極」で「よくある」が多いなど、「知性」型で時間を守らせながらの傾向がある。それに対して、「感性×積極」は、「ときどきある」が少なく「ほとんど・まったくない」が多く、「感性×調整」は、「よくある」が少ないなど、「感性」型では、逆の傾向がある。勉強するように言い、時間を守らせるというしつけ面では、「知性」型が熱心と言える。

勉強をめぐるコミュニケーションでは、「勉強を見ている」（②-3）で、「知性×積極」で、「よくある」が多く「ほとんど・まったくない」が少ない以外は、差異は見られない。

表8 子ども観と親の家庭学習への関わり

①お母さんの家庭学習への関わり

①-1勉強をするように言っている

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	5,992 63.2%	2,799 29.5%	622 6.6%	68 0.7%	9,481 100.0%
知性×積極	4,956 61.3%	2,440 30.2%	623 7.7%	71 0.9%	8,090 100.0%
感性×積極	5,537 60.2%	2,835 30.8%	752 8.2%	71 0.8%	9,195 100.0%
感性×調整	5,677 60.7%	2,962 31.7%	660 7.1%	56 0.6%	9,355 100.0%
合計	22,162 61.4%	11,036 30.6%	2,657 7.4%	266 0.7%	36,121 100.0%

②お父さんの家庭学習への関わり

②-1勉強をするように言っている

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	1,109 12.3%	4,463 49.6%	3,244 36.0%	186 2.1%	9,002 100.0%
知性×積極	986 12.8%	3,639 47.4%	2,880 37.5%	173 2.3%	7,678 100.0%
感性×積極	1,002 11.4%	4,174 47.5%	3,437 39.1%	167 1.9%	8,780 100.0%
感性×調整	1,023 11.5%	4,255 47.8%	3,448 38.8%	171 1.9%	8,897 100.0%
合計	4,120 12.0%	16,531 48.1%	13,009 37.9%	697 2.0%	34,357 100.0%

①-2勉強する時間を決めて守らせている

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	3,575 37.7%	3,549 37.4%	2,278 24.0%	79 0.8%	9,481 100.0%
知性×積極	3,031 37.5%	2,950 36.5%	2,024 25.0%	85 1.1%	8,090 100.0%
感性×積極	3,346 36.4%	3,318 36.1%	2,439 26.5%	92 1.0%	9,195 100.0%
感性×調整	3,595 38.4%	3,385 36.2%	2,300 24.6%	75 0.8%	9,355 100.0%
合計	13,547 37.5%	13,202 36.5%	9,041 25.0%	331 0.9%	36,121 100.0%

②-2勉強する時間を決めて守らせている

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	561 6.2%	2,459 27.3%	5,761 64.0%	221 2.5%	9,002 100.0%
知性×積極	545 7.1%	1,926 25.1%	5,004 65.2%	203 2.6%	7,678 100.0%
感性×積極	553 6.3%	2,173 24.7%	5,845 66.6%	209 2.4%	8,780 100.0%
感性×調整	509 5.7%	2,288 25.7%	5,891 66.2%	209 2.3%	8,897 100.0%
合計	2,168 6.3%	8,846 25.7%	22,501 65.5%	842 2.5%	34,357 100.0%

①-3勉強を見ている

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	5,818 61.4%	3,303 34.8%	298 3.1%	62 0.7%	9,481 100.0%
知性×積極	4,893 60.5%	2,822 34.9%	309 3.8%	66 0.8%	8,090 100.0%
感性×積極	5,466 59.4%	3,313 36.0%	341 3.7%	75 0.8%	9,195 100.0%
感性×調整	5,796 62.0%	3,221 34.4%	286 3.1%	52 0.6%	9,355 100.0%
合計	21,973 60.8%	12,659 35.0%	1,234 3.4%	255 0.7%	36,121 100.0%

②-3勉強を見ている

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	825 9.2%	4,998 55.5%	2,974 33.0%	205 2.3%	9,002 100.0%
知性×積極	657 8.6%	4,176 54.4%	2,672 34.8%	173 2.3%	7,678 100.0%
感性×積極	737 8.4%	4,831 55.0%	3,024 34.4%	188 2.1%	8,780 100.0%
感性×調整	754 8.5%	4,991 56.1%	2,969 33.4%	183 2.1%	8,897 100.0%
合計	2,973 8.7%	18,996 55.3%	11,639 33.9%	749 2.2%	34,357 100.0%

①-4勉強をしたか確認している

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	7,553 79.7%	1,595 16.8%	266 2.8%	67 0.7%	9,481 100.0%
知性×積極	6,346 78.4%	1,424 17.6%	251 3.1%	69 0.9%	8,090 100.0%
感性×積極	7,254 78.9%	1,571 17.1%	300 3.3%	70 0.8%	9,195 100.0%
感性×調整	7,525 80.4%	1,555 16.6%	219 2.3%	56 0.6%	9,355 100.0%
合計	28,678 79.4%	6,145 17.0%	1,036 2.9%	262 0.7%	36,121 100.0%

②-4勉強をしたか確認している

	よくある	ときどきある	ほとんどない・まったくくない	不詳	合計
知性×調整	875 9.7%	3,539 39.3%	4,361 48.4%	227 2.5%	9,002 100.0%
知性×積極	748 9.7%	3,003 39.1%	3,737 48.7%	190 2.5%	7,678 100.0%
感性×積極	825 9.4%	3,422 39.0%	4,342 49.5%	191 2.2%	8,780 100.0%
感性×調整	811 9.1%	3,552 39.9%	4,341 48.8%	193 2.2%	8,897 100.0%
合計	3,259 9.5%	13,516 39.3%	16,781 48.8%	801 2.3%	34,357 100.0%

※クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。